

2020年5月31日(日)

老球の細道546号

5月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

毎年今頃は「目に青葉 山ホトトギス 初ガツオ」などと口ずさみながら季節感を味わっていたが、今年は「日々コロナ 耳に三密 ロマスク」で、いつのまにか新緑も終わってしまった。感染者が出ていない会津地区に住むのに、過剰なまでの自粛に、これで果たしているのかと毎日自問自答しながら生きている。私個人としてはコロナよりがんや高血圧による心臓発作や脳卒中のほうが怖い。それにしても、会津地区はなぜ感染者0なのか？

1・テレビから

◆「空想の翼で駆け 現実の山野を往かん」〈BS プレミアム：新日本風土記スペシャル〉

大好きな松本清張の作品に取り入れられた場所を鉄道で旅する番組を見た。その中で、清張が旅先で、義肢制作の会社を起業した夫婦を応援する言葉として紹介された。その夫婦は清張に贈られた言葉を大事にして、その言葉を刻んだ石碑を自宅前に建てた。想像力を駆使することで厳しい現実を生き抜いていくことができる。今まさにその時か。

2・読書から

◆「一番最初にチャレンジしたことに失敗はありません。誰もがやったことがないのだから、何が成功で失敗かは誰にもわかりません。自分があきらめた瞬間が失敗なのです」〈『スポーツ教養入門』岩波ジュニア新書：河内敏光〉：河内氏は2005年、当時の日本バスケットボール協会のプロ化実現に向けての行動力のなさに憤慨して単身bjリーグを立ち上げた。このチャレンジがあったからこそ、その後Bリーグ実現を可能にした。何事も1番目にやることに価値がある。今コロナ禍の中でも、リーダーに問われる資質である。

3・新聞から

◆「わからない、かなわないといった“不可能性”を体験することのほうがうんと大事。それに打ちのめされつつ、それを楽しむ。そういう“嬉しい敗北”から出発してこそ人は前に進む」〈朝日：折々のことば・小山田徹〉：本当に強くなるためには、ものすごく強い相手に徹底的に負けてからスタートする。バスケットボールのチーム強化も同じである。

◆「感謝の日差しで花が咲く。不満の嵐で花が散る」〈朝日：天声人語〉：コロナだけでなく「不安」や「正義」というウイルスが不満や不信を世の中にまき散らしているという。ギスギスした気持ちへの治療薬、ワクチンは「感謝」という薬である。この薬に副作用はない。

◆「自粛とは、自らの判断で慎めばよいのであって、誰かに要請されるものではない。現状は、強制的に慎む、“強粛”というべきだろう」〈朝日：オピニオン&フォーラム：真山仁〉

仕事を失う人たちが増えている中、自粛警察という“新たな仕事”ができたようである。お金にはならないが正義感で満足するらしい。「ただ生きている」の日々にならないよう、自縮筋肉とつきあいながら、思考は自粛することなくのんびりコロナの収束、終息を待つ。